

故福田一志氏との思い出

村川逸朗

一昨日も、3回目となるお墓参りに出掛けてきた。今回は花を買って、既に“ほおずき”や菊の花でいっぱいになった花立てに刺して、「仕事を頑張る」旨を告げた。墓地は長与町の丘陵部の高台にある。見晴らしが良いところで、北側には大村湾を望むことが出来る。旧石器時代の遺跡である堂崎遺跡は東側の視界からはそれるが、視界の範囲には他の遺跡が存在するだろう。

故福田一志氏とは、昭和54年4月に長崎県教育庁文化課（現学芸文化課）に嘱託の調査員として中田敦之氏と私の3名が同期として奉職して以来のつきあいとなる。特に故福田氏とは、休みを利用した遺跡の分布調査、資料採取等々から、仕事が終わった後は、良き飲み友達として、思案橋や浜口等で一緒に過ごすことになった。

年齢的には私が一つ年上ではあるが、正直な所、常に福田氏が師匠であり実質的な先輩格だったような気がしてならない。調査員としてまだ間もない頃、休みを利用して五島と一緒に行き分布調査を行ったことがあった。福江から岐宿町へと向かう国道を車で走っていると、彼は突然停まり車から降りて分布調査を始め、実際黒曜石のフレーク等を採集することがあった。上五島高校時代の郷土歴史クラブの顧問だった久原先生の薫陶と大学時代のトレーニングによってか、事も無げに旧石器時代等の遺跡を発見する事が出来た。もちろん湧水地点の溜め池とか周辺の自然地形を読んだ上での事だったと思うが、私が学生の時はアルバイト等で大学主催の発掘調査等に参加することができなかったことから、野外のフィールドを舞台とする考古学を行う上では、ずいぶんと学ぶことが多かった。この後は富江に行き、彼が学生時代に採集し、田中文房具店に寄贈した女亀の剥片鏃も見学して帰った。

後日、私の故郷である吉井町福井に行くことになり、福井洞窟から1km上流に位置するサヌカイトの原石が散布する所を案内した。彼は山道によって切られた切通し面を丁寧に観察していたが、その中から一片の石器を引き抜いた。驚いたことに両面加工の尖頭器（ポイント）で、どっしりとしていた。この尖頭器を資料紹介したのが昭和54年の12月に故福田一志氏による『長崎県の考古学Ⅰ』に掲載された「長崎県金城遺跡発見の尖頭器」である。この資料紹介を契機として、この場所は所定の手続きを行った後、『長崎県の遺跡地図』に周知の遺跡として登録された。

その後も、西海町ケイマンゴ遺跡、九州横断道関係の諫早市雀ノ倉遺跡・柿崎遺跡と、その遺跡で出土した石器については、彼が石器の実測から文章と一手に報告書をまとめていた。柿崎遺跡は、県文化課として初めてまとめる本格的な旧石器時代の遺跡で、ナイフ形石器をアセンブリッジ（その当時の生活相を表す有意な石器群）とする貴重な遺跡だった。これを見事にまとめあげたのは、彼が母校である別府大学の橋昌信教授の愛弟子として、学生時代に蓄えた力量からすれば当たり前な事だったかもしれない。その当時、彼から聞いたのは、諫早警察署裏の切り通し面には、ATと阿蘇4の地層がみることができるということで、地層に恵まれた大分県の旧石器時代の研究成果を長崎に還元しようとの気持ちも持っていた。平成12年には、彼は江迎町根引池遺跡の発掘調査を行い、良好なナイフ形石器文化期の石器と、石刃の接合資料を得ることができた。この遺跡が立地する草の尾台地は、台地の東側の佐々川衝上断層によって形成された谷間に存在する福井洞窟とは指呼の距離にあり、福井洞窟では、このナイフ形石器期の文化層が空白であることが調査者である芹沢長介氏により指摘されていた。その空白期を草の尾台地上の発掘調査によって確認できたのは大きな成果であると思う。

まだまだ出だしのところであり紙数も尽きそうにないが、彼が「口先だけでなく、ちゃんとやれよ！」と言っているような気がするので、こちら辺で筆を置くことにしたい。

(平成23年8月17日校了)